

展覧会概要 2025.1.17

2024 年度冬季展覧会

金沢美術工芸大学 大学院博士後期課程 1 年 研究制作展

## 空間・空間・空間・空間

展覧会名	金沢美術工芸大学 大学院博士後期課程 1 年 研究制作展 空間・空間・空間・空間
会期	2025 年 2 月 21 日(金)~2 月 27 日(木)
開場時間	10:00~18:00 (最終日は 17:00 まで) 会期中無休
会場	石川県政記念しいのき迎賓館 ギャラリーA・B
観覧料	無料
アーティスト (あいうえお順)	新藤美希 Shindo Miki (日本画) 田中宏和 Tanaka Hirokazu (彫刻) 張揚 Zhang Yang (漆芸) 武超 Wu Chao (油画)
主催	金沢美術工芸大学
共催	石川県政記念しいのき迎賓館
後援	金沢市 北國新聞社

### 展覧会ステイトメント

「空間」について考える。本展では4人の学生がこの課題に向き合います。平面表現における空間、立体表現における空間、インスタレーションという表現、作品を設置する展示空間、鑑賞者と展示空間との関わりなど、「空間」は美術作家の作品制作・発表と切っても切り離せない関係にあると言って良いでしょう。日本画・油画・彫刻・漆芸という異なる分野の学生が日頃から制作活動を共有するうちに、「空間」は4人に共通するキーワードでありながら、それぞれが思う「空間」には確かな違いがあることに気付きました。そこで本展では、展覧会名を「空間・空間・空間・空間」とし、各自の視点からの「空間」に対する解釈や表現をひとつの場所に集めることを試みています。本展に向けて「空間」について知見を深めながら、意見を交換・共有し、そこで得た気づきを制作や解釈に反映させてきました。その成果を博士後期課程1年の研究制作として発表いたします。どうぞご高覧ください。

(金沢美術工芸大学大学院博士後期課程1年一同)

## 本展の特徴

金沢美術工芸大学では、例年2月にその年の博士後期課程の1年生が企画・運営する研究成果展をしいのき迎賓館で開催してきました。この展覧会は単なる研究成果展という位置付けにとどまらず、毎年学生が趣向を凝らした展覧会を開催しています。そうして先輩方から紡がれてきたこの展覧会は今年度で幕を下ろし、来年度からは新しい方法・場所での展示が開催されることになりました。市民の皆さんには、我々の活動を知っていただくだけでなく、ひとつの転換点となるこの展覧会をご高覧いただければと思います。

## 参加アーティスト

### 新藤美希 Miki Shindo

1998年富山県生まれ

金沢美術工芸大学大学院博士後期課程日本画分野1年

自分だけの理想郷である「非在郷」をテーマに日本画を制作している。非在郷は、私の理想を詰め込んだ現実に存在しない世界であり、日常生活や現代社会から一旦離れ、再び前向きに生きるための活力を養う拠り所である。自作品の重要な表現として波のような曲線模様がある。それによってその世界の幻想性や神秘性を高めながら、風や温度、香りなどの目には見えないものの表現を試み、非在郷の非現実性を表現しようとしている。加えて、博士課程では「非在郷」を構築するために極楽浄土や理想郷に関連の深い「阿弥陀来迎図」（浄土教絵画の主題の一つ）を中心に、理想郷の研究をしている。思想面では浄土思想やユートピアについて学び、制作では来迎図の来迎雲の表現を参考にしている。そして最近では、非在郷の時間や場所などの世界観を構築する上で、北陸で生まれ育った私にとって特別で理想的な季節である春と冬の季節感が重要であると考え、そのイメージが感じられるような作品の制作をしながら、私にとって非在郷がどんな世界観なのかを言葉にしようとしている。



近年の作品に、生き物たちが化石の船に乗って長かった冬を越え、春に向かう様子を描いた『春へ向かう船』、墨流しを参照し、初めて曲線模様を描く試みをした《海の記憶》がある。《海の記憶》以降、曲線模様を描く表現を模索するようになり、現在に至る。日本美術院 研究会員。



左：《春へ向かう船》(2024) 右：《海の記憶》(2023)

#### (今回の展示の取り組み)

今までは典型的な日本画しか制作してこなかったが、本展や同期との関わりを機に、空間に対する知見が広がった。新しい空間への意識が芽生えたことを活用して、自身の制作や展示ではあまり考慮していなかった空間について学びたいと考えた。そこで今回は、平面表現の空間に対する自身の解釈を少し広げるために、鑑賞者の方が絵の一部を物理的に移動して画面構成が体験できる作品を制作する。隣に展示される典型的な日本画（自作品）に対して、挑戦的なその作品が鑑賞者の方にどう映るのかに関心がある。本展を通して、自身にとっての空間がどんな意味や効果、可能性を持つのかを再考察した上で刷新し、今後の考え方や制作に活かしていきたい。

## 田中宏和 Hirokazu Tanaka

1998年岐阜県生まれ

金沢美術工芸大学大学院博士後期課程彫刻分野1年

うつ病の経験を元に、立体表現・インスタレーション表現を中心とした作品を制作しながら、自己や他者に対するケアの在り方を探求している。修士課程までは、反復行為を手法とした作品制作をうつ症状に対するセルフケアとして行っていた。現在は、言葉を話さない私の



作品が鑑賞者に対してどのようなケアをもたらし得るかを考えている。それと同時に、空間やモノをケ

ア対象として注意深くまなざしながら、私自身の制作行為がそれらへのケアになる瞬間を探っている。このふたつの取り組みをひとつの作品に落とし込めたときに、私なりのケアが見えてくるのだろう。

近年の作品に、瞑想行為として造形された石の球体を並べ、静謐な空間を作る《曇を切り取る》(2022)、用意された展示会場への不満に対する違和感から、理想的な展示会場であるホワイトキューブの留保を比喩した作品を提示することで、この展示会場に向けられた不満の理不尽さを表出し、この場のありのままの姿を肯定することを目指した《おやすみ、僕らのホワイトキューブ》(2023)などがある。《曇を切り取る》は招聘審査員特別賞(日野雅司氏)を受賞。主な展覧会に「GRAY 田中宏和 個展」(2022、芸宿/金沢)、「みのかも annual 2019」(2019、美濃加茂市民ミュージアム/美濃加茂)。



左：《おやすみ、僕らのホワイトキューブ》(2023) 撮影：青山啓佑 右：《曇を切り取る》(2022) 撮影：池田ひらく

(今回の展示の取り組み)

制作活動が続ける中で、ひとつの対象をケアしようとする時に何か他のものを蔑ろにしてしまうことに違和感を覚えた。私は、何者も蔑ろにされず、その場の皆が等しく尊重される空間を模索したい。そのため本展では、私自身、鑑賞者、展示空間など複数のケアの対象を想定し、それら全てに対するケアがひとつの空間において同時に叶えられるのかを検証する。そこでは、まずはベースとして鑑賞者が穏やかさ、安心、優しさを感じられる空間作りを目指す。それに加えて、鑑賞者以外のケア対象を発見するために、まずは時間をかけて丁寧に展示空間を観察する。そしてそこで分かったことを元にどのようなケアができるかを検討する。また自身に対するケアとして、今までのように制作行為をセルフケアの一環と捉えながら、制作によって自身がケアされる感覚を大切に制作を進める。最終的にはこれらの取り組みをひとつに繋ぎ合わせ、その場にいる全ての存在が蔑ろにされない空間を構築することを目指す。そしてその成果を、自身のケア観の要素として取り込みたい。

## 張揚 Zhang Yang

1996 年中国山西省生まれ

金沢美術工芸大学大学院博士後期課程漆芸分野 1 年

漆絵を施した現代漆器を制作している。中国文化に伝承される昔話の中で、自身が感動し享受したポジティブなメッセージを漆絵の題材とし、漆器という表現を通して現代社会にその有用性を伝えることが、制作テーマである。そのテーマにおいて、日本や中国の伝統的な漆器



の装飾表現を応用しつつ、昔話の登場人物の表情や動作、またその情景や物語を漆絵として具体的且つ表情豊かに描き出すことが重要なコンセプトとなると考えている。同時に、その題材に合わせた漆器の形体を造形することも重要なコンセプトである。装飾性と物語性を重視した漆絵と、物語に基づく形体を兼ね備えた漆器を制作し、現代漆器にもうひとつのあり方を提示する。

近年の作品に、中国の昔話である『鼠の嫁入り』から発想を得た《浮世故事 鼠女》、同じく中国の昔話である『鴉が水飲む』から発想を得た《鴉》などがある。これらは、物語を基盤に漆絵と造形の融合を図った作品である。主な展覧会に「張揚 個展」(2024、ガレリア Ponte/金沢)、「第 3 回 薪技芸 国際青年工芸展」(2023、吉林/中国)、「第 77 回金沢工芸展」(2021 金沢/日本)。



左：《浮世故事 鼠女》(2024) 撮影：岡村喜知郎 右：《鴉》(2024)

(今回の展示の取り組み)

漆器という立体表現における「空間」と、その漆器に描かれる漆絵という平面表現における「空間」、このふたつの空間表現をひとつの作品の中で、組み合わせ融合することが博士課程における自身の表現方法の向上のために必要であると考えます。今回の展覧会では、上記の空間表現を深化させることを軸

に、照明や空間的な配置といった展示空間における空間表現についても包括的に考える。この試みを通じて得た気づきや学びを今後の制作に活かしていきたい。

## 武超 Wu Chao

1993 年中国山西省生まれ

金沢美術工芸大学大学院博士後期課程油画分野 1 年



天然素材を使用して、人間の細胞と宇宙の相似性を絵画やインスタレーションで表現している。私は宇宙が人間と同じような生命体であると考えている。例えば、人間の細胞の誕生と死は星のそれと似ている。また、目には見えないが観測装置を使って可視化された宇宙のダークマターと人間の脳神経はその姿が似ている。このような相似性に興味を持ち、道教の「天人同一」の思想やフラクタル科学の見地を取り入れながら、ミクロな細胞からマクロな宇宙まで全ての物事が同じシステムの上に成り立っていることを作品で表現することを試みている。細胞と宇宙を同時に比喻することができる素材として鉄や砂などの天然素材を使用し、鉄は血液や地球の核を、砂や土は地球の記録や生命の源までを象徴している。

近年の作品に、宇宙に存在するダークマターの分布と脳細胞ネットワークの相似性に着目し、それが「天人同一」の考えを呼び覚ます記憶かもしれないという想像的仮説を表現した《ダークマター-細胞の中の記憶-》(2023、KANABI クリエイティブ賞 2023 卒業・修了制作部門学長賞)。卵細胞のうちで混沌の中から人間の形が形成される不思議な現象の神秘性に焦点を当てて表現した《卵細胞》(2024、全国漆喰鏝絵コンクール展新人賞)がある。主な展覧会に中国当代油画系列招待展(2016、太原/中国)。中国山西省油絵協会会員、中国山西省女性芸術家協会会員。



左：《ダークマター-細胞の中の記憶-》(2024) 撮影：中川暁文 右：《卵細胞》(2024)

(今回の展示の取り組み)

初めてインスタレーション作品を制作したのは修士2年の時で、それまでは平面作品の制作に取り組んでいた。そして今は、平面表現をインスタレーションに応用させることに興味を持っている。ただ、今は応用させる理由が曖昧であるため、今回の展示では今一度それぞれの形式の作品が鑑賞者にどう働きかけ、それがどう違うのかを整理し、その理由を明らかにしたい。そのために、今回は鑑賞者が大きな作品の内部に立ち入ることができるインスタレーション作品と、今まで取り組んできたような平面作品を同時に展示する。今後は本展の成果を活かして、平面表現を応用したインスタレーション作品を制作していきたい。

## イベント

### ■公開講評会

各学生の作品を学外から招聘した講師の方に講評していただきます。学生1人につき20分程度の講評後、展覧会全体への感想と質疑応答を30分程度予定。この公開講評会を、市民の皆様に我々の活動をより詳しく知っていただける機会にしたいと考えています。

講師 : 横山由季子氏 (東京国立近代美術館研究員)

大岩雄典氏 (美術家)

会場 : 石川県政記念しいのき迎賓館 ギャラリーA・B

開催日時 : 2月22日(土) 14時~16時(横山氏)

2月24日(月) 14時~16時(大岩氏)

参加費 : 無料

## 会場アクセス

展覧会拠点: 石川県政記念しいのき迎賓館 (石川県金沢市広坂2丁目1番1号)

\*東京より 北陸新幹線で金沢まで 約2時間30分

\*大阪、京都より サンダーバード・北陸新幹線で金沢まで約2時間30分

\*JR金沢駅バスターミナル 兼六園口(東口)、金沢港口(西口)よりバスにて「香林坊」下車(所要時間約10分)、徒歩約5分

\*金沢駅兼六園口(東口)からタクシーで15分

\*金沢21世紀美術館から徒歩5分